

Title	石濱文庫所蔵日本漢詩文関係文献についての覚書
Author(s)	合山, 林太郎
Citation	
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/31834">https://hdl.handle.net/11094/31834</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 石濱文庫所蔵日本漢詩文関係文献についての覚書

合山 林太郎 (文学研究科・日本文学)

はじめに

石濱文庫には、日本漢詩文（日本人が制作した漢詩文集）も多数含まれている。『石濱文庫目録』（大阪外国語大学、1977年。以下、『目録』と呼ぶ）では、「日本漢文学」の項には、200点ほどの書目が掲出されているが、他の分類に著録された日本漢詩文関係の文献も多く、その総数はより多いものとなるだろう。本稿では、その特徴について、いくつか気が付いた点を述べる。なお、書籍の刊行年などはこれを略し、人物の生没年は主要なもののみを記した。

## 1 近世・近代の漢詩文集、明治期以降の漢詩文雑誌

石濱文庫の日本漢文学関係資料の多くを占めるのは、幕末・明治、さらに大正、昭和にかけて、すなわち、石濱の生涯と近い時期に刊行された漢詩文集である。たとえば、『天保三十六家絶句』、『嘉永二十五家絶句』などの、元号絶句集と通称される、時々の詩文の大家の作品を集めた詞華集や、山根立庵『立庵遺稿』、木蘇岐山『五千卷堂集』をはじめとする明治期の名の通った漢詩人の別集が収められている。また、『東京繁昌新詩初編』、『京都明治新誌』、『新橋雑記』、『東西両京市誌』など、都市風俗を和臭の強い漢文で記した繁昌記の類も、相当数蔵されている。

明治期以降の漢詩文雑誌も多く見られる。『大正詩文』、『昭和詩文』といった当時の代表的な漢詩文雑誌のほか、『興文新誌』、『古桐朗玉』、『別才集』などの、明治期以降の大阪で編まれた、やや珍しい雑誌も収められている。

このほか、江戸中後期の漢詩文集も相当数あり、そのなかには、朝鮮通信使唱和集『両東闘語』など、今日、伝存がそれほど多くない資料もある。

## 2 藤澤家、日柳家関係の漢詩文集

日本漢詩文集のなかでも、多数を占めるものに、泊園書院を経営した漢学者藤澤東咳（1795-1865）・南岳（1842-1920）・黄坡（1876-1948）の著作がある。東咳の『東咳先生文集』や黄坡の『黄坡遺稿』などの別集が収められるほか、『南岳餘筆』、『栄観録』、『名勝詩纂』など、多数の南岳関係資料が所蔵されている。

石濱は、『徂徠尺牘便覧』を得て、稀本を入手したと思い喜んでいたら、黄坡より泊園文庫に該書があることを告げられた旨を、自身で回想している（『浪華儒林伝』全国書房、1942年、180-181頁）。こうした藤澤家との交流のなかで、石濱の蔵書が構築されていったことが推測される。

ほかに文庫内に多く収蔵されるものとして、日柳燕石（1817-1868）・三舟（1839-1903）父子の著作がある。燕石は、幕末期に活躍した讃岐・琴平の文人。勤王の志士として有名である。三舟は、燕石の令嗣であり、明治期に大阪桃谷に居を構え、浪華文会を運営した。

燕石関係の書物としては、刊本の詩文集に加え、『柳東軒詩稿』、『柳東軒略稿』などの写

本の詩文稿が所蔵されている。三舟については、彼の別集『覆甕小甕』が3部蔵されている。また、三舟が発行した漢詩文雑誌『海内詩媒』や『侯鯖詩話』が、欠号を含むものの、ほぼまとまったかたちで所蔵されている。とくに『侯鯖詩話』は、王漁洋など清代の中国文人に関する三舟の評論を多数掲載し、幕末・明治期の漢詩文の潮流を知る上で興味深い。

### 3 写本資料の重要性

石濱文庫の日本漢詩文関係資料には、写本に良質なものが含まれている。南海電鉄の創始者松本重太郎が幼少期にその塾に通ったとされる漢学者小田奠陽の詩文稿『小田奠陽詩文稿』はその一つであろう。他にも、天保期の郡山藩士高橋紀一が、伊勢を遊歴した際の逸事を記した漢文紀行『勢游紀行』や、芥川丹丘ら江戸中期の儒学者・文人の作品を中心に、中国・日本の詩文を抄出した『恰受亭隨筆』など、現在、標準的に用いられている国書の目録やデータベースでは、所蔵が確認できない資料も多数存在する。

江戸中期の大坂の町人学者山片蟠桃『草稿抄』は、写本の漢詩文集のなかでも重要なものであると考えられるが、この書には「大正丙辰、余購此書上冊於鹿田氏松雲堂。按其目六卷、今止有之卷、因屬鹿田氏物色之。辛酉一月、鹿田氏偶移其書庫、得此書中下二冊於故書堆中、遂并歸余挿架、而蟠桃遺稿始為足本、合浦珠還、延津劍合、喜曷可言。是月七日記 炳卿（句読点は筆者による）」という識語が付されている。本書を大阪の書肆鹿田松雲堂から購入したこと、また、1916年（大正5年）に上巻のみ入手した後、1921年（同10年）、鹿田松雲堂の書庫整理に際して、残りの書巻を得たことが記されているのであるが、文中の「炳卿」は、内藤湖南（1866-1934）の字と思われる。すなわち、本書は、内藤湖南から石濱の手に渡ったものと推測される。

なお、写本のなかでは、山口睦齋『西讚游記・東讚游記』、後藤芝山『擬宮詞一百首』、高尾竹溪『竹溪文稿』『竹溪詩稿』など、讚岐と関係の深い文献が多いことも注目される（芝山、竹溪はいずれも讚岐の人）。

### むすび

以上に見たように、石濱文庫の日本漢文学関係資料は、近世・近代の日本漢詩文集を豊富に有すること、明治期の大阪の漢文学と関わりの深い藤澤南岳や日柳三舟らの資料が収蔵されていること、石濱文庫にのみ所蔵が確認できる写本の資料が多数あることなどの点で、研究資源としてきわめて重要であると言える。

しかし、これらの資料は、『目録』に掲載されるのみであり、国文学研究資料館の「日本古典籍データベース」などの、日本文学関係の代表的なデータベースには登載されず、その存在が広く知られているとはいいがたい（「全国漢籍データベース」に掲載されるのは、石濱文庫の漢籍のデータのみである）。当該資料の書誌データを早急に整備（電子化）・公開すること、また、その蔵書形成過程を解明することが必要である。